3、美的…家具を細く観察する。不足破損を指摘する。絵をかく等。回数62回　2.4%

4、身だしなみ的……風呂に入る。更衣、服装をなおす等。回数191回　9.3%

5、生活的躾的…食事、掃除、洗濯、寝る、便所、手伝い、会話、あいさつ、勉強、読書等。回数1068回　41.4%

右は10例の行動を分析分類したものを参考としたものである。

幼児のことば

名古屋市立保育短期大学
甲斐久生
渡邊紀久子

一、目的

幼児の言語生活の実態を調査して、幼児の言語発達や言語の習得状況を知り併せて、日常のことばづかいや陥り易い言語の欠陥などを洞察し、正しい言語環境の在り方や幼児の心理的発達に即してことばの補導も考えて行き度いと思う。第一回の実態調査は保育園に於ける知能普通児を調査対象としたものである。

二、調査の方法と対象

午前九時より正午までの自由あそびの時に話す三十分の言葉を精密に観察記録し、それを基として結果をまとめた。記録を取る日はあそびが自由に出来る晴天の日に行い子供が動き廻つている後を目立たないようにしてつけて廻つた。記録の期間は一昨年の十月から昨年の二月迄でこの調査は大体昨年の七月までにまとめたものの報告である。調査にあたつては同一語をくり返し使用する場合同一語を除いて異つた語だけを計算した。対象児は満三、四、五、六才の名古屋の保育園々児で、三才児約二十名、四才児約二十名、五才児三十名、六才児三十名、計約百名である。ここに掲げてある数字は、第二表、第五表をのぞく他はすべて言葉の実数を示すものである。

第一表

分類	年令 / 男女別	3才児 (3.8—3.11) 男	3才児 女	4才児 (4.0—4.11) 男	4才児 女	5才児 (5.0—5.11) 男	5才児 女	6才児 (6.0—6.11) 男	6才児 女
語い量	一ケ年保育園児	301.0	330.7	325.6	363.6	412.9	368.3	361.8	480,0
	二ケ年保育園児	—	—	780.3	403.5	686.0	460.0	574.0	602.6
	三ケ年保育園児	—	—	—	—	660.0	562.0	679.8	776.5
	平均	304.0	330.7	462.0	384.9	564.2	419.3	568.2	557.3
名詞	一ケ年保育園児	58.5 (21.3%)	47.8 (14.6%)	49.0 (15.4%)	65.3 (18.7%)	80.1 (19.9%)	55.2 (14.6%)	55.2 (16.0%)	89.6 (19.5%)
	二ケ年保育園児	—	—	130.4 (16.5%)	83.5 (19.4%)	92.8 (13.7%)	62.9 (15.8%)	81.5 (14.8%)	97.7 (16.6%)
	三ケ年保育園児	—	—	—	—	135.3 (20.5%)	87.1 (15.5%)	105.6 (15.4%)	101.2 (13.1%)
	平均	58.5 (21.3%)	47.8 (14.6%)	73.4 (15.7%)	70.8 (18.9%)	77.6 (17.2%)	60.9 (15.1%)	89.4 (15.3%)	89.3 (17.7%)
助詞	使用された助詞	62.3 (20.5%)	54.3 (16.4%)	79.7 (14.5%)	70.3 (18.3%)	129.8 (22.1%)	91.3 (19.7%)	131.4 (18.8%)	131.0 (21.1%)
	ぬけた助詞	19.0	18.5	21.8	27.3	27.5	31.3	34.0	35.6

三、調査項目

1、語い量

2、名詞の量とその内容

3、使用された助詞、並にぬけた助詞の量とその内容

4、文について

四、調査の結果

満三才から満六才までの幼児の使用する語い量を調査した結果を表示すると第一表のようになる。これによると語い量の増し方は各年令における性差が著しく、男児では四才が語い発達の著しいあゆみをみせているが、女児は四才には男のような増加の傾向はみれず六才になつて急激に増加している。これらの場合各年令毎に可なり個人差があり、勿論地域、環境などによつても異るであろうから、一概に断定することは出来ないと思うが大体の傾向はうかがうことが出来ると思う。

次に入園年数別調査によると、年数を重ねるに従つて男女とも次第に語い量の増加の傾向が現れてくる。殊に入園後二ケ年児の語い習得はめざましく、四才の男児では一ケ年から二ケ年の間に、二倍の増加を示している。これは園という環境的条件が言語の発達を促進したものと思われる。五才、六才の男児も同じく二ケ年までの間に一ケ年児の一、五倍の増加がみられる。それ以後はあまり差はみられない。つまり新しい環境の中に入つた入園後の一年間が語いの習得率が極めて旺盛であることがうかがえる。

以上は幼児の習得した語い量の増加をみたものであるが、次に名

詞の量をみると文献による名詞の量とこの調査による名詞の量との比較では、前者の方が著しく多くなつている。この大きな相違は動詞の比較からしても、この調査場面がうごきのあそびであることが

第二表

	3才児 (3.0—3.11)		4才児 (4.0—4.11)		5才児 (5.0—5.11)		6才児 (6.0—6.11)	
	男	女	男	女	男	女	男	女
自然現象	2.4%	2.5%	3.4%	0.7%	3.2%	1.8%	2.5%	4.2%
動物	4.4	2.5	5.5	2.6	1.6	1.0	3.2	3.8
植物	1.3	—	1.2	0.6	0.8	0.6	—	1.3
鉱物	0.5	11.7	2.8	2.0	2.5	3,7	1.2	0.7
家屋	0.3	1.0	3.6	2.3	4.6	5.8	3.9	4.0
人	13.4	26.4	11.8	22.6	12.4	16.8	11.2	23.4
身・体	4.6	0.9	4.4	3.4	3.2	3.2	3.6	3.4
病気・薬品	0.3	—	1.1	1.1	0.9	0.3	0.3	0.6
飲食物	4.6	9.0	2.6	7.8	2.7	6.7	2.5	4.2
服装品	1.2	—	0.5	2.9	0.5	1.4	1.3	1.5
日用品及び器具	11.4	7.2	8.0	10.9	8.9	9.2	6.7	5.6
遊戯及び遊具	2.5	—	1.9	2.7	3.4	3.2	3.6	3.3
社会的事項	18.0	3.7	16.4	5.3	14.6	6.7	16.5	7.6
主なる個有名詞	11.6	21.7	11.7	12.3	15.3	23.5	10.2	12.4
文化	0.5	1.0	2.8	2.7	2.6	2.1	3.3	3.5
その他	23.0	23.0	22.3	20.1	23.0	14.0	30.6	20.5

第三表　　(　　)はぬけた助詞数

	格助詞		副助詞		接続助詞		終助詞	
	男	女	男	女	男	女	男	女
3才児 (3.0—3.11)	17.5 (15.5)	23.0 (11.1)	6.8 (4.0)	4.7 (5.0)	17.0 (—)	18.3 (0.9)	21.0 (0.3)	8.3 (1.5)
4才児 (4.0—4.11)	27.0 (17.7)	23.3 (20.6)	5.7 (3.7)	5.3 (4.3)	24.3 (—)	18.0 (1.7)	22.7 (0.4)	24.0 (0.7)
5才児 (5.0—5.11)	51.7 (19.5)	36.3 (23.3)	10.9 (7.1)	6.5 (5.8)	37.7 (0.2)	27.0 (1.8)	28.5 (0.7)	21.5 (0.5)
6才児 (6.0—6.11)	49.0 (23.7)	49.4 (27.0)	11.3 (10.3)	7.6 (6.8)	33.4 (—)	48.0 (0.6)	37.7 (—)	26.4 (1.2)

第四表　　（　　）はぬけた助詞数

	格助詞		副助詞		接続助詞		終助詞	
	男	女	男	女	男	女	男	女
3才児 (3.0—3.11)	ので 5.7(—) に 3.3(0.6) が 2.8(1.0) と 2.5(3.8) へ 1.5(2.5) を 1.4(0.3) は 0.3(7.3)	の 9.0(0.2) に 4.5(1.3) が 2.0(3.8) で 2.0(0.2) へ 1.8(—) と 0.8(—) を 0.3(5.6)	も 3.4(0.3) は 2.4(3.7) か 1.0(—)	も 2.5(0.8) では 1.2(—) は 1.0(4.2)	て 13.5(—) から 2.5(—) のに 0.5(—) し 0.5(—)	て 13.8(0.9) から 3.0(—) けれど 1.0(—) のに 0.5(—)	ぞ 6.3(—) よ 5.5(0.3) な(なあ)5.5(-) ね 2.2(—) や 1.3(—) ぜ 0.2(—)	よ 5.2(1.0) ね 1.9(0.5) な 1.2(—)
4才児 (5.0—5.11)	が 4.3(4.6) の 7.0(—) に 4.0(1.0) で 2.7(0.3) へ 2.0(—) を 1.0(9.8) と 1.0(2.0)	の 6.4(0.7) と 5.0(0.6) に 4.0(2.7) が 3.3(4.8) で 2.7(—) へ 1.6(0.4) を 0.3(11.4)	も 2.7(0.4) は 2.2(3.0) でも 0.8(0.3)	も 3.2(—) は 1.7(4.3) だけ 0.4(—)	は 6.0(7.1) も 4.7(—) けれど 0.2(—)	は 4.1(4.5) も 2.2(0.8) てもて 0.2(0.5)	も 6.3(0.7) は 4.0(9.6) まで 1.0(—)	も 4.0(0.2) は 2.8(6.6) でも 0.2(—) だけ 0.2(—) ばかり 0.2(—) くらい 0.2(—)
5才児 (5.0—5.11)	の 18.0(1.2) に 9.8(0.7) が 7.7(6.6) と 5.8(0.3) で 5.3(—) へ 4.3(0.2) を 1.4(10.5) か 0.4(—)	の 12.3(2.5) へ 8.0(—) が 5.3(3.5) に 4.1(1.0) と 3.5(1.8) で 2.6(0.5) を 0.5(14.0)	て 19.7(—) から 3.2(—) けれど 1.4(—)	て 15.9(0.4) から 1.7(—) し 0.4(—) と —(1.3)	て 32.6(0.2) から 3.7(—) のに 0.8(—) でも 0.6(—)	て 21.7(1.0) から 3.8(—) ば 0.5(0.5) けれど 0.4(—) のに 0.4(—) でも 0.2(0.3)	て 21.0(—) から 8.4(—) ても 2.7(—) し 1.0(—) けれど 0.3(—)	て 38.0(0.4) から, 6.6(—) でも 2.2(—) ば 0,8(—) けれど 0.4(0.2)
6才児 (6.0—6.11)	の 16.6(2.1) に 8.7(1.5) と 8.0(1.8) で 6.0(0.3) が 4.7(5.7) へ 3.3(—) を 1.7(12.3)	の 18.2(1.8) に 10.4(1.8) が 5.6(6.0) と 4.7(2.0) へ 4.4(—) で 2.6(2.2) を 2.5(13.0) や 0.2(—) か —(0.2)	ぞ 6.3(—) よ 5.6(—) な 5.0(—) や 4.0(—) ね 1.8(0.4)	よ 16.8(—) わ 3.4(0.3) ね 2.0(0.4) な 1.5(—) か 0.3(—)	ね 7.3(—) な 6.7(—) よ 4.8(6.7) ぞ 4.5(—) や 3.2(—) さ 1.7(—) ぜ 0.3(—)	よ 12.0(0.5) ね 7.0(—) な 1.8(—) わ 0.4(—) さ 0.3(—)	ぞ 12.0(—) よ 9.3(—) や 6.2(—) な 5.5(—) ね 4.4(—) ぜ 0.3(—)	よ 14.7(1.0) ね 6.8(—) な 2.8(—) わ 1.5(0.2) や 0.6(—)

大きな原因となつている。名詞の数は年令が大きくなるに從つて全体の語い量に対する割合が減少する傾向がみられる。これは他の品詞がより多く使用される結果であろうと思われる。次に名詞の内容を十六項目に分類しこれを百分率で示してみる。（第二表参照）これによると名詞の中で「人」が最も高率を示していて全体の一七％次に「個有名詞」の一五％、「社会的事項」の一一％、「日用品及器具」の八％の順になつている。いちばん少いのは「病気、薬品」の〇・六％で性別に見ると「社会的事項」が男児に特に多く使用され女児の約三倍も使われている。これに対し女児は「人」、「個有名詞」、「飲食物」、「服装品」が男児よりも多い。

助詞の形態の調査は助詞を格助詞、副助詞、接続助詞、終助詞、の四つにわけてその量をみ更にその各助詞の内容を分析した。その結果は第三、四表のようになる。まづ使用された助詞をみると、年令別、性別などを通して格助詞が最も頻繁に使用され、ついで接続助詞、終助詞、副助詞の順に多く使用されている。性差は五才の男児が各助詞とも女児をしのいでいる程度で全体にわたつてあまり差がみられない。各助詞の分析の中で一番多いのは「の」でついで「に」「が」「と」での順で七種類から八種類使用している。副助詞では「も」「は」など三種類であるが、六才の女児は六種類も使つている。次に接続助詞は「て」「から」など三種類から六種類まで終助詞では「よ」「ぞ」「な」など三種類から七種類使われている。これによると格助詞と終助詞は三才頃でも殆ど全ての種類を使用することになるが副助詞はわずかに副助詞の全種類のうちの五分の一しか使われない。また接続助詞は副助詞よりもやゝ多く全種類の三分の一使われることになる。次にぬけた助詞と使用された助詞とを分析比較してみると一番多く使用された格助詞が一番多くぬけており大体において種類別順位は、使用された助詞と反対になつている。このぬけた助詞の調査は調査の基準が厳密すぎたきらいがあるが、参考までに助詞の内容を厳密に吟味してみたもので、これによつて幼児に形式的な言語生活をしいるものでは決してないことを申添えておく。格助詞の次に多くぬけるのは副助詞であるが、接続助詞の終助詞はごく僅かで幼児の話語文としては殆どもれなく使用されるといえる。使用された助詞とぬけた助詞との比較は以上のようであるが、あそびの場における助詞形態の相違については次のような結果になつた。すなわち五才、六才の男児三十名について、あそびの場を「砂場あそび」、「室内あそび」、「描画」の三つにわけて三者を比較してみると助詞の使用量に相当のひらきがみられる。これを語い量にてらし合せてみると砂場あそびにおける助詞は、描画のそれにくらべて一番多く使用されている。ついで「室内」が多く、使用率は「砂場あそび」と「描画」との丁度中間になつている。ここで面白いと思うのはぬけた助詞が「描画」に一番多いことで、「室内」、「砂場」の順に少くなつている。この現象はあそびの性質による相違であろうと思われる。四つの助詞の内

第五表

	単文	複文	重文
3才	93.4%	4.4%	2.2%
4才	90.4	5.3	4.3
5才	86.1	8.1	5.8
6才	84.3	7.4	8.3

容分析による種類別順位は前に述べた結果と殆ど一致している。最後の第五表は文の形態がどんなに発達してゆくか単語の分化と文の構造をみようとしたもので（第五表参照）話語文の内容を単文、複文、重文にわけ、単文に対して複文や重文の増し方をみると年令の増加につれて次第に複文、重文が増している。これによると三才になると複文も重文もすべて出揃うことになるが、その数はまだごく僅である。次にことばの内容であるが、大体五才になつてくると話語文の内容が複雑になつてくる。四才の男児によくみられる傾向であるが、なんでもかでもよくおしやべりをする傾向が現れている。まだ十分にことばを使いこなす力がないようで連想をたくましくしても自分の思う通りに文があやつれず乱脈文になつている場合がよく見られる。例えば、「今年ぢやないよ、来年だよ。今年の来年でないよ。」「ぼくの家ね、かんしよの家のね、タバコ屋のかんしよだよ」など言葉の順序を考えずに関心のあるもの、印象の深いことを先に話そうとしてことばを羅列している。また「僕があかいひこーきにのつて姉ちやんがきいろいひこーきでそんで僕があかいひこーきにのつたよ。」のように何回もくどくどと同じ意味のことばをくり返したり、現実の話から急に及びもつかない話に飛躍するようなこともしばしばみうけられた。五才の殊に女児に自分で自分のことをほめるような傾向がみうけられる。例えば砂場あそびや描画のときに、「私はこんなに上手よ、こんなにきれいに出来たわ。」と自分自身に言いきかせているようにほめている。一般に見て五才ごろから話語文も長くなり話しことばもかなりまとまつた言葉が使いこなせるようになり、相当困難な場面でも上手に扱つている。例えば、ニュース映画をみて話し合いをしても、いろいろ複雑な場面の展開を割合適確につかんで大人でも分るようにことばの表現も上手になつている。六才までの全体の傾向としては、取り上げる程でもないが助詞の使用があやまつて文の形態を完全な意味に表現していない無縁文が見られる。例えば、「あたまでうつちやつた」（を）（を）

「手をうつと骨でまがるんだよ。」（が）「そこのまつすぐにゆくの」

などである。次に平均よりも多い子供のことばの内容を検討してみると、一般に語い量の多い子供の話語文は語い量の少ない子供の話語文よりも、ことばの内容が長く正しいということが常識的に考えられるが、語い量が多くても同じ意味のくり返しや乱れたことばづかいが使われていることが多い。

五、結　論

文献によると言語の発達においては女児の方が男児よりすぐれていると云われるがこの調査ではいづれの点でも男児のほうが女児よりすぐれていることになる。これは調査の面が幼児の生活全体に亘つてなされなかつたところに原因があるものと思われる。この調査による女児の語い量が偶然の結果でなくて、諸説のように女児の語いがすぐれているとすれば女児は園生活より家庭の生活の方が言語活動が盛んであるということも一応考へられる。一女児の調査であるが園児が家へ帰つてからの話語文の記録と園における話語文とを比較してみると、名詞の種類に著しい差異がみられる。このことを考え合わせるとこの場合ことばは実際に知つていても表現されていないということが考えられてくる。それぞれの環境によつて幼児の

話語文は変つてくる。といえるしたがつてこの調査によつて子供の生活場面のひろがりや、文化の過程を知ることは困難である。ぬけた助詞の調査については、幼児の話語文中にみられる助詞の使い方の方の実態を知る一つの参考として行つたもので特にぬけた助詞の量を問題とするのではない。ぬけた助詞量のその結果を取り上げて幼児に完全な言語生活を要求したり、特別にことばの訓練をしてみる必要はなく、これは成熟による自然の発達をまてばよいのではないだろうか。勿論相手に意味が理解されないようなことばや、又発音不明瞭や、早口、乱棒なことば、まわりくどい話しことばなどは周囲の理解ある手によつて正しく指導されなければならないことは云うまでもない。正しい言語指導は幼児に大人じみたことば使いをさせることではなく、あくまでもおさな児のことばから出発したこどもらしく、素直で明るい、はきはきしたことば使いを習得させることでありたい。幼児に正しい言語指導を行うには幼児の生き生きした実際の言語発達を十分理解しての上でなければならない。それにはまづ幼児の語い、基礎的ことば、幼児語などを十分に理解することが必要である。日頃実際に私達の扱つている園児の個々について語いの量や、言語の習得状態などを心得ておきそれを基礎として科学的な補導をすることによつてこの目的が達せられるのではあるまいか。

排尿排便の躾（トイレットトレーニング）の調査

名古屋市立保育短大　珠川善子
一宮市葉栗保育園　高島榮美子
〃　白木喜美子
〃　櫻井良子

調査の動機

乳幼児期の躾が、パーソナリティの形成に非常に大きな影響を与えるということは、最近十年あまりの間に色々議論されるようになつた。そこで私達は、乳幼児期の躾の中でもことに排尿排便の躾について考えてみた。排尿、排便の躾について、現在の日本ではどのように行われているか、その程度を知る意味において、排尿排便が自立出来るまでの経過に関する問題、及び母親、子供の態度の問題